

# 算命学中庸

## 【初年】 4 7 回目

4 7 目の授業はこのページからです。

授業科目           【人体図三分法】

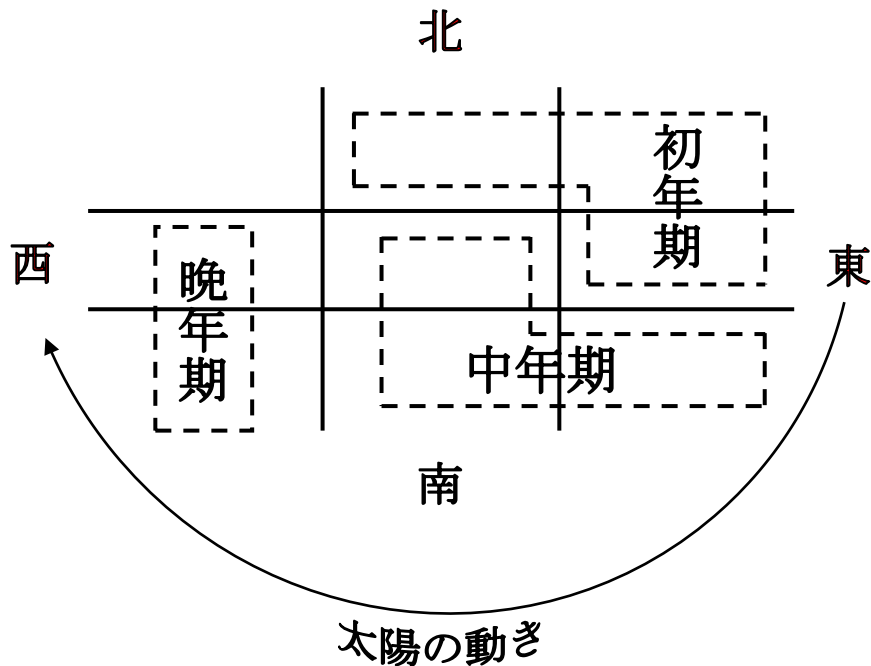
【初年】 4 7 回目 【人体図三分法】 01

### □ 人体図三分法（じんたいずさんぶんほう）

人体図三分法は、人生を大きく三つの時代に分割して占う技法です。

一生を大きく三つの時代に分けて占う技法 ⇒ **三分法**

**宿命（1）三分法**



一生を **初年期** **中年期** **晩年期** と、大きく3つに分けてまして〔この人の初年期にはこういう特徴がある〕とか〔中年期になると、このような生き方に変わってくる〕とか〔晩年期はどのような特徴があるのか〕というのを、それぞれの区分で観ていく技法です。

人体図には、東西南北の方角が決まっているわけです。上は北、下は南、向かって右側が東、左が西です。方角に、太陽の動きを当て嵌めて、という考え方は、

前にも出てきました。

太陽は東から昇って、南を通過して、西へと沈みます。

人体図をそっくり、自然界に当てはめて見ると……、太陽は東から昇って来ますから、まずは東の空が明るくなります。お昼になると太陽は南の方に移動しますから、南の空が明るくなって、夕方になると西に移動しますから、西の空が明るくなって来ます。

この自然界の事象をもとにして、人体図を3つの場所に区切って考えたのです。

**三分法** を見ますと、人体図を初年・中年・晩年に分けてあります。

初年期は（北と東）がまとまっています。

中年期は（東と南）に区切りができています。

晩年期は（南と西）がまとまっています。

なぜ——このように区切られているのか、それは陰占宿命のほうに理由があります。

いずれどちらも学びます。そこで理解できます。

基本として——太陽は東から昇り、南を通過して、西へと沈みます。軌道に沿って自然界の形があります。

その動きに「初年」「中年」「晩年」という人間の人生を当て嵌めて考えていきます。

「初年」「中年」「晩年」これら 3 つの時代の場所は、人体図のなかで決まっています。

この時代を順番に「天区分」<sup>てんくぶん</sup>「人区分」<sup>じんくぶん</sup>「地区分」<sup>ちくぶん</sup>と、呼ぶ場合もあります。

しかし「初年期」<sup>しょねんき</sup>「中年期」<sup>ちゅうねんき</sup>「晩年期」<sup>ばんねんき</sup>と呼称する場合が圧倒的に多いのです。

ゆえに、人体図のなかには「初年期・中年期・晩年期」の場所があるということ覚えてください。

実際にそのほうがわかりやすいのです。

初年期（天区分）・中年期（人区分）・晩年期（地区分）となります。

## ⇒ 「初年期」

〔20 歳～25 歳位〕と言えないこともないのですが、この区分の〔年齢〕は、あくまで目安に過ぎません。算命学で考えている「初年期」は〔社会に出るまで〕というのが基本です。法律的には、〔20 歳〕から大人で、〔19 歳〕までは未成年とされています。 ➡

そうしますと、大体〔20歳位〕までが、初年期なのではないの？ と思う方もいらっしゃると思いますが、それよりも、〔社会に出るまで〕これが本来の基準なのです。

いま現在だと、大学までいく人は多いですね。

大学を卒業して、就職するとしたら、22歳か23歳位になっています。

あるいは、一浪とか二浪とかすると、もっと年齢があがりますし、大学院まで行けばもっと上がります。

このようになりますから、年齢は人によって個人差があるわけです。

大学を卒業して、社会に出たとしたら〔22～23歳位〕までが、その人の初年期と考えます。

あるいは、高校を卒業して、すぐ社会に出たというのであれば、その人は〔18歳〕までが初年期です。

このように個人差があることを、前提にして考慮していただきたいのです。

……社会に出る前までは、初年期といいましたが、これは結婚も含まれます。

社会に出ないで、学校を卒業して、すぐに結婚したとすれば、「私は1度も社会に出ていません」といっても結婚すれば、社会に出たのとおなじと考えています。

昔でしたら〔15や16歳〕でお嫁に行くのが当たり前という時代もあったわけです。

その時代であれば、〔15や16歳〕でお嫁に行く前までが初年期です。お嫁に行ったら中年期です。

余談ですが「明治天皇」を考えますと……。

父・孝明天皇〔21歳〕、母・中山慶子〔16歳〕のときに生まれています。その明治天皇は〔16歳〕で一条美子と結婚しています。一条美子は明治天皇の正室（昭憲皇太后）です。

男子も〔15や16歳〕で奉公に出るのが当たり前の時代もありました。

そういう時代であれば〔15歳、16歳位〕までが初年期ということになるわけです。

このようなことからしても、個人差があるのは当然ですし、時代によって、年齢設定を替えていかなければいけないはずです。

### ⇒ 「中年期」～「晩年期」

初年期の終わり～50歳代までと考えています。

50歳代までということなので、60歳位までを中年期と考えてもよいわけですが、社会に出たら、中年期になります。このことからして、社会から退<sup>しりぞ</sup>けば、中年期が終わります。

ゆえに、社会から退くまで、あるいは第一線から退くまでが中年期です。

サラリーマンの方で〔60歳〕が定年退職だとすれば、大体〔60歳〕までと考えてよいですね。

〔昨今は定年延長の議論もあるようです〕

ただし、これも人によって、かなり個人差があります。

〔私は70歳ですけど、まだ第一線ですよ〕という方もおられるわけですから、その時代、その人物の状況に即<sup>そく</sup>して考慮します。

主婦とか女性の場合は、夫が引退して隠居生活のような生活に入ったら、その主婦の女性がまだ〔50代〕であっても中年期は終わった。と考えます。

しかし、その女性が――夫とは別に、社会で頑張っていれば、それは中年期と見なしてよいのです。

その女性の生き方によります。

自営業は、定年というのがなく、何歳になっても、現役で仕事を続けている人もおられます。

たとえそうであっても、子供とか、あるいは後継者に主たる仕事を譲<sup>ゆず</sup>っていたら、それは第一線から退<sup>しりぞ</sup>いたと見なします。

名目上は社長であり続けたとしても、実質的に子供に主な仕事を任せていけば、それは晩年期に入っていると考えてください。

さまざまな事例がありますので、どのように考えたら良いのか……ということがあると思います。

〔たとえば〕一代限りで譲<sup>ゆず</sup>ろうとしても、譲る人がいないので仕方なく、自分が第一戦で働き続けていると



しても、その働き方は若くてバリバリやっていた頃とは違っているはずです。

〔たとえば〕朝 8 時から仕事していたのに、年齢的に 9 時から仕事をはじめているかも知れません。

あるいは、体力に合わせて、仕事の量も減らしてきていることもあるでしょう。

明らかに、若い頃とは働き方が違っているはずです。後継者がいないので自分が働かなければいけない状況かも知れませんが、働き盛りを過ぎた働き方になっていけば、もう中年期を過ぎたということになります。実質のほうを重視してください。

政治家の場合、判断しにくいと思いますが、長老議員といわれたら、それは晩年期です。

〔たとえば〕小泉前総理は〔2008-9-25〕この日――衆議院議員に立候補しない意向を明らかにしました。ですから晩年期に入ったわけです。

現代、平均年齢が長いので、〔60 歳〕では老人とは考えないような時代になっています。ゆえにもう少し多め

に考えないといけないでしょう。

年齢的には、〔65歳・66歳〕くらいまでが、中年期と  
考えてよいかと思います。

その区切りは、ピタッと替わるわけではありません。

何年かの歳月をかけて、中年期から～晩年期へと移行  
していくわけです。

ゆえに〔65歳・66歳〕くらいまでの幅を考えておくと  
よいでしょう。

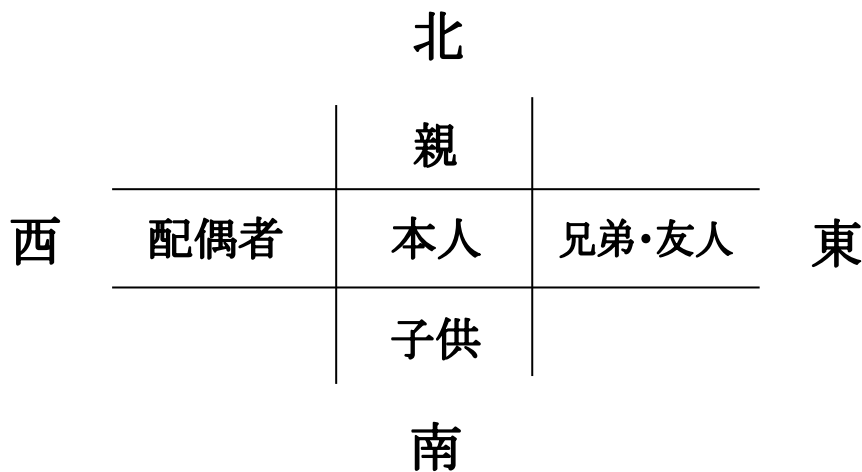
⇒ 一生を「初年期」「中年期」「晩年期」と3つに区分  
しますと、初年期の場所にどの星が出ているのか……  
中年期にはどの星が出ているのか……、晩年期は……  
〔何の星が〕どの場所にでて来るのかは、人それぞれ  
違います。

それを観て占いをしていくのです。

人体図には、でて来る星とは別に、『人物の場所』があ  
るのです。 ➡

- 🔍 人体図を見るときに『人物の場所』があります。  
『人物の場所』は、どなたでも共通して存在します。

## 宿命（2）人物の場所



人物の場所は確定しているので、替えることはできません。

- ☞ 人体図の真ん中は〔主星＝本人〕の場所になります。  
自分を中心に置いて、自分より上の場所（北）には自分よりも目上の人たちがこの場所に入ります。  
目上の人たちのなかで、代表的な人物は親です。  
ゆえに（北）は親の場所と考えます。

- ☞ 自分よりも下の場所は（南）です。  
自分よりも目下の人たち、部下とか後輩とかもそうです

が、自分より下の人たちのなかで、自分の人生に最も関わりが深くなると思える人物は〔子供〕です。

それゆえに、まずは**子供の場所**と考えてください。

上が親の場所、本人は真ん中、下が子供の場所です。

☞ 本人と横に並ぶ同列の場所は、本人と同世代の人物が入ります。対等で上下がない人という意味があります。

向かって左側（西）は**配偶者の場所**、向かって右側は配偶者以外で自分と同列の人ですから、**兄弟・友人の場所**、このように場所と人物配置は決まっています。

☞☞ 『人物の場所』は三分法に限らず、人物の占いをするときには、これらの場所は必ず必要になります。この場所の配置はぜひ覚えておいてください。

☞ ノートに人体図を書いて、人物を記入して見てください。これらの場所と人物の配置はとても大切です。

勉強しているうちに、自然に覚えるともいえますが、占うとき、特に人間関係の占いするときには、必ず、人物の場所をつかうようになります。

それら人物の場所に「十大主星」のどの星が載っているのか（出ているのか）、その星は人によって異なります。そのことについては、段階的に学びます。

〔たとえば〕配偶者の場所に〔車騎星〕が載っているとすれば「車騎星の質（行動力）のある配偶者と縁えんができますよ」とかの意味にもなるのですが、実際に占うときには、より詳しく考えていくことになります。

☞ 人体図の本人の場所にでているのは〔主星〕です。

〔主星〕として出ている「十大主星」が、その人物の性格であり、本質を意味します。

☞ 『人物の場所』この場所については、いくつかの考え方があります。

どなたでも、人間関係というのは、本人自身（自分）が中心で成り立っていると考えているわけです。

**どなたでも本人自身を中心**

〔たとえば〕自分の立場で、親を考えるときには——  
〔この人が私のお母さん〕で〔この人が私のお父さん〕

と思いますよね。

その人物を〔お父さん〕〔お母さん〕と呼べる立場になるには、自分を中心に置いて、ほかの人物を見た場合だけのはずです。

<sup>ほ か</sup>他人の人たちから、その人物を見たら〔お父さん〕でも〔お母さん〕でもないわけです。

<sup>ほ か</sup>他人の人から見たら〔お父さん〕という人物は、あるときは、誰かの子供でもあるし、あるときは誰かの夫にもなるし、あるときは、誰かの友達、あるいは兄弟とかであったりするわけです。

自分が〔お父さん〕だと思っている人物は、あくまでも自分を中心にして、その人物を見たとき・考えたときに、その人物はお父さんになるわけです。

〔たとえば〕**Ⓐ**という人物の子供が**Ⓑ**なら、**Ⓑ**が大人であっても、**Ⓐ**は**Ⓑ**を自分の子供という目線でしか見ないわけです

自分の子供**Ⓑ**という人物は、あくまでも、**Ⓐ**自身から

見た場合は子供なのであって、他人の人から見たときには、その②という人物は子供ではなくて大人です。

他人から見たら、②は大人であり、誰かの上司かも知れないし、先輩かも知れないし、誰かの夫とか妻とか、いろいろな立場が②にはあるはずです。

それなのに、①から眺めれば——②は自分の子供だということで、②を自分の子供という目線で見ってしまうのです。

〔たとえば〕 ③女性と④男性は結婚しています。

③女性の夫を④男性とすれば、③女性は④男性に対して、自分の夫という目線で、④男性に接するわけです。

つまり、どんな人でも、自分を中心に据えて、物事を考えていくわけです。

どんな人でも、自分が中心にものごとを考えている

どなたでも、知らず知らずのうちに、自分を中心にして物事を考えているはずですよ。

〔たとえば〕「あの人はいい人……」「あの人は少し問題ある……」と思ったり、いったりしますけど——、

「あの人はいい人ね」と言ったときに、それはあくまでも自分から見たら「いい人」に見えるだけであって、他人の人に言わせたら、その人物が「いい人」とは限りませんよね。

「あの人っ、顔も見たくない」というかも知れません。

あるいは、皆さんが小学生位のときに、年齢〔20歳位〕の人を見たら、どういうふうに見えましたか……？

子供の頃、〔20歳位〕の人を見たら、すごく大人に見えたかと思います。

でも、自分が〔20代後半〕の大人になってから——、〔20歳位〕の人を見たときに、どこか幼く見えるかもしれせん。

子供の頃、〔20歳位〕の人を見たら、すごく大人に見えたのに、自分がもっと大人になってから、〔20歳位〕の人を見たら、どことなく幼く見えることもあります。

その〔20歳位〕の人が……大人なのか、幼いのか、といえば、それはあくまで自分から見て、ですよ。

自分中心で見て、自分が子供のときは〔20歳位〕の人



は大人に見えたけど、自分をもっと大人になったら、  
幼く見えるというだけのことですよ。

あの人若い、この人は年を取っているとか、そういう  
基準にしても、自分中心に考えてのことです。

ここで申しあげたいのは……どなたも、自分を中心に  
して、自分の観方、あるいは価値観を基準にして物事  
を考えていますよ。ということです。

自分に限らず……<sup>たにん</sup>他人も自分中心に物事を考えている。

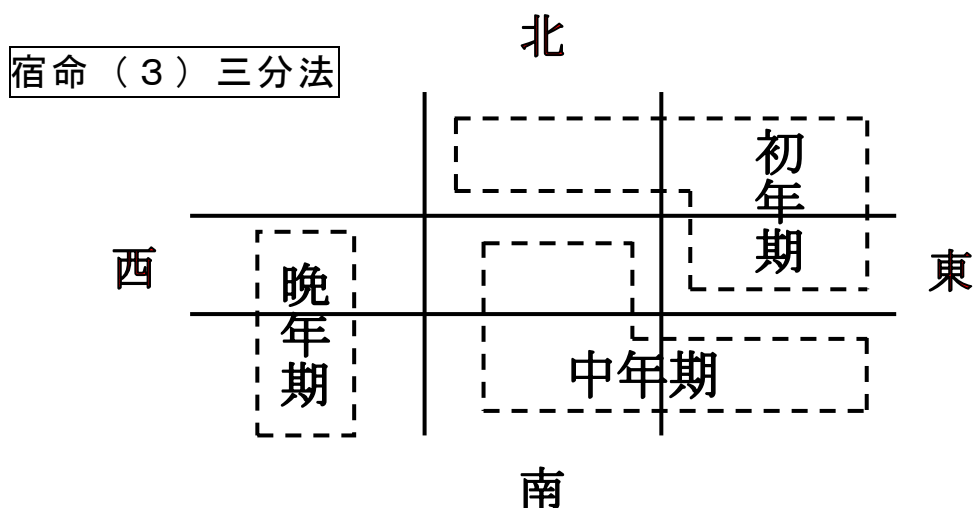
この事実を知る必要がある。

このように算命学は考えているのです。

自分が自分を中心に、自分を基準にして物事を考えて  
いるのですが、このことは自分だけの話ではなくて、  
<sup>ほか</sup>他人のたちの誰もが自分中心に物事を考えています。  
ということさえ知っていれば、自己中心的な人にはな  
りません。という話なのです。

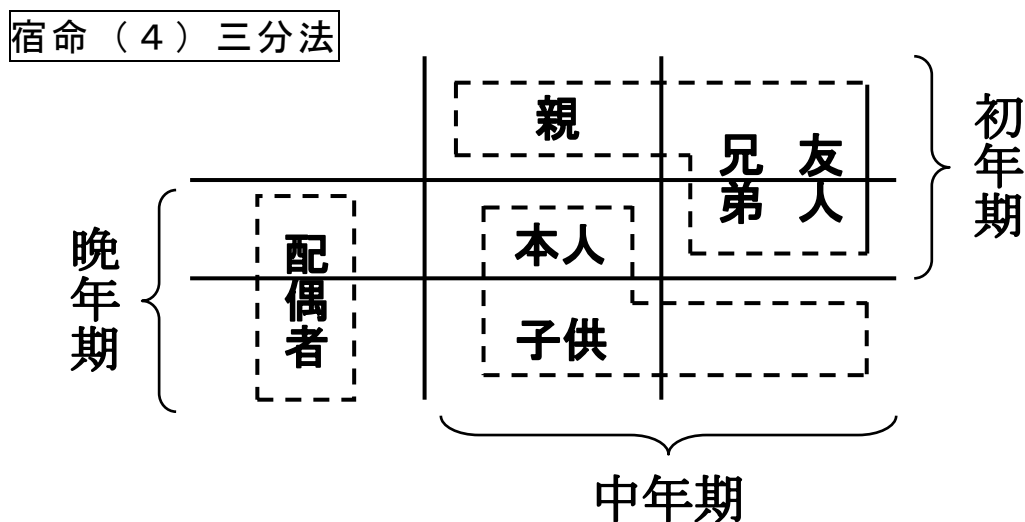
自分は自己中心的にものを考えるけど、相手も自分を中心に  
して、ものを考えているのだ。ということさえ知っていれば、  
自分勝手な人にはなりませんよ。と言っているのです。

自己中心的な人は、まわりから、社会から孤立してしまうのです。人体図を観て、自己中心的な人なのか、どうかを判別する方法があります。



そうしますと、宿命（3）三分法のように、人物の場所を改めて書き直しました。

その人物の場所に、三分法が<sup>あてはまる</sup>当て嵌まるのです。



- ☞ 初年期の場所には、親の場所、兄弟・友人の場所が含まれます。
- ☞ 中年期には、本人の場所と子供の場所が入ります。
- ☞ 晩年期には、配偶者の場所が入ります。

そうしますと、「初年期」の親の場所〔第四命星〕に〔禄存星〕が載っていれば「父親と縁が深い初年期になりますよ」という話もあるわけですが——その話とは別にして、人間であれば、誰もが基本的に三分法を備えていると考えているのです。〔禄存星は父親の星です〕  
どなたでも『人物の配置場所』はおなじです。

親の場所に〔禄存星〕ではなくて、ほかの星が載っていても、「初年期」だけは、誰でも親との縁が深い時代なのです。それは初年期が親の場所だからです。

そして、兄弟・友人とも縁が深い時代なのです。

なぜなら「初年期」の〔第三命星〕は、兄弟・友人の場所だからです。

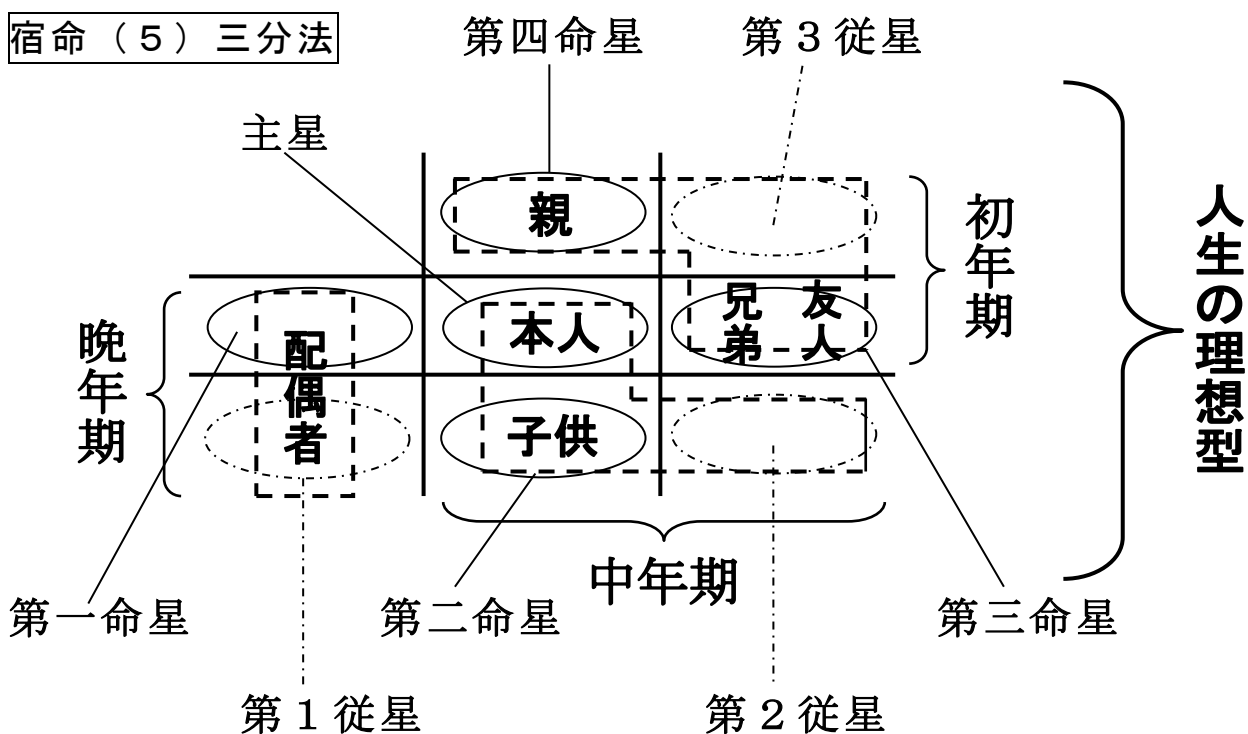
実際にそうですよね……兄弟いうことで、一生を通して考えると、兄弟と一番縁が深かった時代は初年期の

はずです。大人になれば、兄弟とは別々に家庭をもちますから、家族ではなくなり、親戚になるわけです。

友人もそうです……子供の頃は毎日友達と一緒に遊んだりしたはずですが。しかし、大人になってから、毎日友達と会っているという人は、まずいないでしょう。

そのように考えると、この型<sup>かたち</sup>はどの人にも、共通していえることです。

どの人にも共通していえる、ということは、この型が算命学で考える理想型なのです。



☞ 「初年期」は、親と縁が深くなる時代です。

そして、兄弟や友人と縁が深くなる時代といえます。そのようになる人が多いと思いますが、そうなることが理想的です。という意味なのです。

〔たとえば〕初年期に兄弟がいない、友達もいないという環境で育つと、それだけでその人は宿命から外れていきます。宿命が活きて来なくなります。両親がいなくても、片親でもいればよいです。

『いない』ということは、まったく存在が無いということ。『真実しんじついない』ということ。養父母でもいれば、それでもよいのです。あるいは「兄弟が育ててくれました」それでも良いのです。

親がいない状況というのは、端的に言えば、両親の存在がなくて、孤児院で育った場合は親がいません。ということであれば、それだけで人生の理想型から外れてしまいます。宿命が活きてこなくなります。孤児院で育つと、普通の人に比べると、多少の個人差はあるでしょうが、難しい部分があると考えています。

⇒ 「中年期」になると、本人と子供の関係です。

親・兄弟は外れます。

なぜかといえば、中年期は親兄弟のチカラを頼らずに、本人の努力、チカラで生きて行きなさいという意味合いがあるからです。

それができていなければ、その人の宿命は生きてこなくなりません。

中年期になったのに、いつまでも親・兄弟を頼って、生きている人がいたら、それだけで宿命が伸びてこなくなりません。

中年期は本人が中心にならなくてはいけないのです。

そして、子供ですけど……。

普通は中年期に子供との縁が一番深くなるはずですが。

子供を生んで育てていく時代です。

⇒ 「晩年期」は、配偶者が来ています。

この型かたちの意味は「年を取ってから結婚しなさい」と、いうことではないですよ。

人生の最後まで付き合う人は『配偶者』です。という意味です。

「初年期」「中年期」「晩年期」は、このよう<sup>かたち</sup>型が理想的な人生です。そのように言っているのです。

そうしますと、理想型の人生を送れる人のほうが少ないかもしれません。

⇒ 人生において、[たとえば] 子供がいない人もおられます。配偶者がいない人もおられます。

あるいは、配偶者はいましたが、離婚しましたとか、他界したという場合もあるわけです。

そのような場合には、どうしたらよいかといえは……

「子供がいません」という人は、子供の場所〔第二命星〕に、子供が載らないのです。

しかし、子供の場所〔第二命星〕に、必ず「十大主星」の「なにかの星」が載っています。出ていますよね。

どなたでも、必ず、そこに星が載っているはずですよ。

実際に子供がいない人は、子供の場所に載っている星をつかうことになります。

「十大主星」なにが出ているのかは、人それぞれですが、子供の場所〔第二命星〕に載っている星の意味合いをつかうのです。

〔たとえば〕 子供の場所に〔玉堂星〕が載っているとすれば、玉堂星は母の星ですから、母との縁を深くすればよいですね。

あるいは玉堂星は知恵の星ですから、その意味を活かして、何かを学べばよいですね。

このように、第二命星にでている星を、特につかっ  
てください。そして、その星の人物との縁<sup>えん</sup>を深くすること  
です。

おわかりになりますでしょうか……？

〔たとえば〕 子供の場所〔第二命星〕に石門星があると  
します。〔石門星〕そのものは、兄弟・友人の星です。  
本当は、第二命星は子供の場所ですけど、実際に子供  
がいなければ、子供の代わり<sup>か</sup>に〔そこに載っている星  
で消化しなさい〕ということなのです。

つまり、石門星の意味を消化するわけです。

〔石門星〕は兄弟・友人の星ですから、それらの人物  
との縁を深くして生きて行きなさいということになり  
ます。そうすることで、宿命<sup>い</sup>が生きてきます。  
このように考えるわけです。



「晩年期」になって、配偶者がいない方の場合は……  
配偶者の場所〔第一命星〕に載っている星を特につかいます。

『十二大従星』の星もよいのですが、〔第一命星〕と  
〔第1従星〕の両方に、必ず、星があるわけですから、  
それらの星に相当する人物とお付き合いをすることでか、  
縁を深くするような生き方をすることです。

〔たとえば〕男性の命式を見たときに、配偶者の場所  
〔第一命星〕に、〔司禄星=妻の星〕が載っているのに、  
実際には配偶者がいないという場合は、司禄星を女性  
と考えて（に置き換えて）、女性との縁を深くすれば良い  
のです。女性の友達をつくるとかです。

〔たとえば〕女性の命式で配偶者の場所〔第一命星〕は、  
夫の場所でもあるわけです。

夫の場所〔第一命星〕には、〔牽牛星=夫の星〕が載って  
いるのに、実際には夫がいなくなれば……〔牽牛星〕  
は夫の星です。（本来は夫がいれば、その女性にとって一番  
よいのですが）実際に夫がいなかったら、これを男性と

考えるのです。(男性に置き換えて)

女性から見て、夫は性別で男性ですから、男の人達とのお付き合いを多くするとよいわけです。

(さきほどの男性の話とおなじですよ)

そうすると幸せな晩年が送れますよ。という話に繋がります。

女性から見て、男性というのは——趣味の仲間でも、何かの稽古仲間でも、仕事仲間でもよいのです。

男性との縁を深くすれば良いということなのです。

このような観方は、勉強のなかに少しずつ取り入れてゆきますので、おわかり頂けるようになって行きますから大丈夫です。

## □ 人体図三分法 [より具体的にご説明します]

万物には「生・旺・死」「始め・中心・終わり」があるとして、人体図のなかに取り入れた考え方が三分法です。人体図を「初年期」「中年期」「晩年期」に三区分しました。このように三区分したのは“自然界の法則”を人体図になかに取り込んだわけです。

その人体図には『人物を配置』できます。

- 〔中央〕 自分自身の場所
- 〔第一命星〕 配偶者の場所
- 〔第二命星〕 子供の場所
- 〔第三命星〕 兄弟・友人の場所
- 〔第四命星〕 親の場所

このようになっています

初年期には、親、兄弟・友人との縁が篤い<sup>あつ</sup>です。

〔第一命星〕の晩年期には、配偶者が配置されています。

「偕老同穴」<sup>かいろうどうけつ</sup>夫婦が最後まで添いとげる意がありますが、晩年期は子供と縁よりも、配偶者との縁が1番深いと考えているのです。それが理想の姿であるとしています。

\* 平成天皇 1933(s8)-12-23

宿命(1) 平成天皇

〔平成天皇は7人兄弟です〕

〔兄弟・友人〕 頑固・独立

〔死病〕 感性・自己顕示欲・鋭敏な神経

	貫索星	天胡星
石門星	貫索星	龍高星 〔偏母〕 離別・放浪・改革・知恵
天将星	調舒星	天禄星

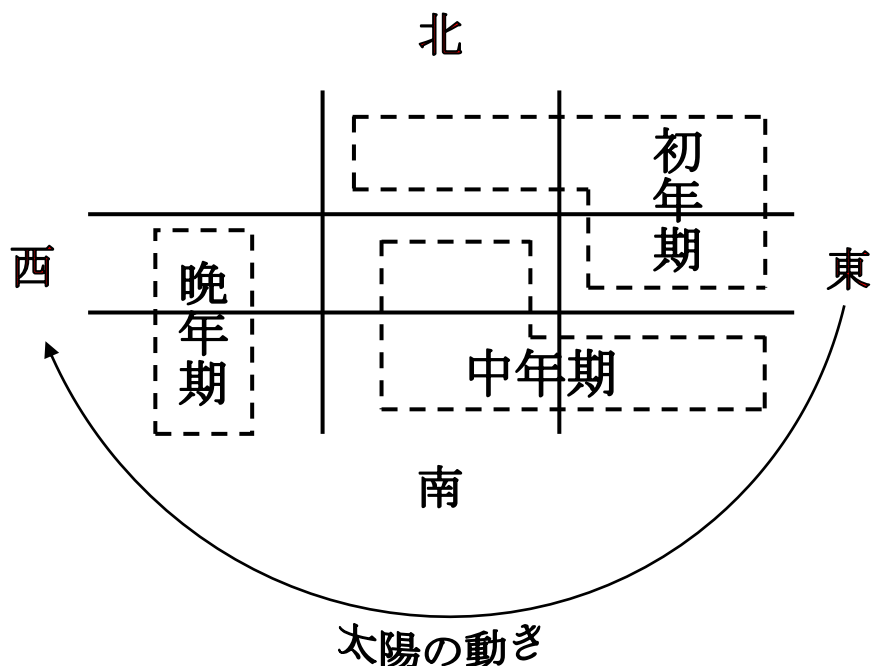
〔兄弟・友人〕 協調・協和

〔子供〕 孤独・ロマン・反抗心

〔貫索星は1人〕〔調舒星は孤独〕という共通点があります。

平成天皇の人体図を書きましたが、三分法をつかって観ていきます。

02頁 宿命(1)三分法 とおなじ図



「初年期」〔貫索星〕〔龍高星〕〔天胡星〕になります。

「中年期」主星〔貫索星〕 第二命星〔調舒星〕

第二従星〔天禄星〕です。

「晩年期」第一命星〔石門星〕 第一従星〔天将星〕のです。

このように区分することができます。

☞「初年期」第四命星〔貫索星〕です。

貫索星の意味合いとして（頑固・独立心・意思が強い）と  
かありました。

☞「初年期」第三命星〔龍高星〕があります。

龍高星意味合いとして（改革・離別放浪・外国の星・好奇心  
心が旺盛）などあります。

龍高星の（改革心・放浪）というのは、どのようにで  
て来るのかといえ、おなじ場所に居たくないという  
気持ちです。おなじところに留まっていたくないから  
改革する。おなじ場所に居たくないから放浪するわけ  
です。それで外国の星といわれます。

龍高星は人物で「編母<sup>へんぼ</sup>」です。偏母は育ての母です。

じっぼ  
実母の代わりに育ての親ですから、兄弟でもよいので  
す。年齢の離れた兄や姉に育てられたでもよいわけです。

⇒ 平成天皇は、実母には育てられていません。

つまり、<sup>ながこ</sup>良子皇太后には育てられていないのです。

<sup>うば</sup>乳母に育てられたわけです。

天皇家において「実母が子供を育てる」という事実は  
平成天皇の時代、美智子様の時代になってからです。

それまでの天皇家には「実母が子供を育てる」という  
歴史はなかったのです。

☞ 第三従星【天胡星】時代としては〔死の一步手前の病人〕  
という意味がありました。〕

感性が鋭い、直感力が鋭い、自己顕示欲が強い星でも  
あります。

この時代は、死ぬときの病人であり、年をとって死ぬ  
ときですから、若い人という意味はありません。

若い人が死ぬとき、若い人の一步手前の病人という意味では  
ありません〕

自然の摂理「生<sup>せい</sup>旺<sup>おう</sup>死<sup>し</sup>」という意味で考えますと——、  
『天胡星』の人物は老人ですけど、『天堂星』も人物  
は老人です。

しかし、天堂星の老人は、天極星のように死を直前に  
時代に当て嵌まりません。

星の条件に該<sup>がい</sup>当<sup>とう</sup>しない場合は、無理して人物を当ては  
める必要はありません。

☞ 「初年期」はどうでしょう……。

平成天皇は、とても好奇心旺盛で、感性も鋭く、かな  
り頑固で、独立心を備えて子供時代であったと考えら  
れます。

☞ 「中年期」はどうでしょう……。

主星の〔貫索星〕には、人物でいえば〔友人・兄弟〕  
という意味があります。石門星もおなじです。

〔貫索星〕と〔石門星〕の違いはどこにあるのかとい  
えば、貫索星には『独<sup>ひと</sup>り』という意味があります。  
それゆえに、独立心そして頑固、つまり〔自分は自分〕  
〔私は私〕という意識です。

自分を押しだして来ますから頑固です。

〔石門星〕は、協調・協和の星で、人物ではおなじく兄弟・友人ですけど、そこには友人・兄弟が多いという意味があるのです。

つぎに、人物を当て嵌めます。

どのような人達と縁があったのかです。

☞ 第二命星の〔調舒星〕は孤独な星です。

〔貫索星〕に『一人』<sup>ひとり</sup>ということで、共通した部分があります。そのように考えます。

〔孤独の星〕と〔個人の星〕です。

そうしますと、彼は孤独で頑固、自分<sup>ひと</sup>独りの<sup>から</sup>殻に閉じこもる人です。つまり、人の意見を<sup>き</sup>聴かない人です。

「私の意見はこうだ……」という人です。

一生を通して、その質がありますけど、特に中年期になると、その意味合いが強くなります。

『十二大従星』の〔天禄星〕は常識的であり、現実性の強い星で<sup>たくま</sup>逞しくて頼り甲斐のある星ですが、優しい星とはいえません。

〔天将星〕をもっています。<sup>さいみきょう</sup>最身強の人体図です。



〔天禄星〕ということでは、常識的なものの考え方を  
する人といえますし、現実的で逞しい星ですから——  
他人から「ああしろ、こうしろと……」意見されるの  
を嫌う中年期であったといえます。

〔貫索星〕人物は、友人・兄弟です。

〔調舒星〕も人物は子供ですから、友人や兄弟、子供  
と縁が深い中年期です。

〔天禄星〕は壮年の星ですから、どのような人と縁が  
深いかといえ、中年の人です。

あるいは、役目としては、補佐役の人物と縁が深いと  
いうことです。

どのような人物と縁が深いのかを言っています。

ここでは良い悪いを論じていません。

〔たとえば〕子供と縁が深いといえ、〔子供に悩まされ  
る〕ということもありますよね。

縁が深いということは、その事に関しての悩みも深く  
なります。子供が悪童あくどうであれば悩むでしょう。

良い子供かも知れませんが、良いとか、悪いとかは、

人体図には書いてないのです。

“縁が深い” というだけです。縁が深いから “良い” とは、<sup>かいしゃく</sup> 解釈しないでください。

決して、そのように受け取ってはいけませんよ。

本人の宿命では、子供と縁が深いから、縁を深めようとするでしょう。

しかし、子供には子供自身の宿命があります。

親が子供に縁が深くても、子供からすれば、親との縁が深くなれば「うるさい親、いちいち口を出してきて」という話かも知れません。

あるいは、まったく親と縁が無いのかもしれない。

そのようにも考えられるのです。

それゆえに「縁が無いほうが良い」ということもあるのです。

縁が無ければ、子供に<sup>わずら</sup>煩わされないで済むという話もあります。

ここでいえるのは……「縁が深い時代」です。という意味なのです。

〔たとえば〕人体図に、龍高星という編母<sup>へんぼ</sup>（育ての母・乳母）と縁が深いと書いてあります。

平成天皇は子供の頃に「世間では、母が子育てをするようだけど、自分には母が傍<sup>そば</sup>にいないくて、乳母……」  
そのように、子供時代は悲しい思いをしたかも知れません。

しかし、それが良いのか、悪いのか……わかりません。

坂本龍馬のように、乳母に育てられたことが、功<sup>こう</sup>を奏<sup>そう</sup>することもあるのです。

☞ 第二命星は〔調舒星〕で、人物は子供になります。

平成天皇の時代になってからですが、美智子妃殿下と天皇のお二人で、子供を育てるようになりました。

平成天皇には子供が3人います。

子供と縁が篤<sup>あつ</sup>いといえますので、子供のことで悩んでいたのかも知れません。

子供縁は篤いのですが、3人のなかで、どの子と縁が篤いのかはわかりません。

3人すべてに縁が篤いこともあるでしょうけど、そうではないかも知れません。

特にこの子とは、縁があるという場合もあるわけです。  
人体図に良い悪いは出てきません。陽占は性格です。  
良いのか、悪いのかは陰占の世界で観ます。  
良い子供に恵まれるとかは陰占です。  
良い乳母であったのかどうかは陰占で観ます。  
全部が良いということは無いのです。  
もし……全部が良いとすれば、全部が悪いのとおなじ  
ことだと算命学は考えています。

「陽極まれば陰」「陰極まれば陽」なのです。

ものすごく幸せだとすれば、ものすごく不幸なことが  
あります。

それは自分ではないかもしれませぬよ。

本人は一生幸せかも知れませぬよ。

でも、その裏には、ものすごく不幸な人がいるわけ  
です。それは兄弟かも知れませぬ。

そのような考え方をしていきます。

表があれば、必ず、裏が存在します。

「ものすごく幸運でした」といえば、その裏には必ず、  
ものすごく不幸な人の存在があると考えてください。

☞ 「晩年期」はどうでしょう……。

〔石門星〕は協調・協和の星、人物は友人・兄弟です。  
中年期は人の意見は聴きたくない、自分の意思を強く  
だします。と書きました。

晩年期は協調性の星〔石門星〕がまわっていますので、  
人間性が丸くなってきて、人の意見を聞くようになり  
ます。

天将星があって、協調性が天将星と結びつきます。

天将星は石門星（協調の星）と結びつきやすいです。

必ずとは言い切れませんが、人体図に天将星のある人は、  
石門星もある。というのは多いです。

この場合の協調性は、中年期になって、自分が主導権  
を取った協調性になります。

自分のところへ“皆集まって来い”とするリーダーシ  
ップと、協調性を発揮する組み合わせになります。

もし、三分法による組み合わせが弱い場合、つまり、  
天将星ではなくて——弱星の場合には、自分から相手  
に合わせてゆく協調性になります。

〔自分に合わせようとするのか〕〔自分が相手に合わせようとするのか〕このような違いになります。

〔たとえば〕石門星と天馳星の組み合わせの場合は、相手に合わせる協調性になります。

このことは、天将星に限らないで……強い星、弱い星でも構いません。

ここでは天将星ですから“気位が高い”という意味も加えます。

晩年期はとても気位が高い姿になります。

☞〔石門星〕の人物は兄弟・友人ですから、平成天皇は「初年期」「中年期」「晩年期」の一生を<sup>とお</sup>通して、兄弟・友人の星に囲まれているわけです。

生まれた頃からの「初年期」には7人兄弟ですから、それだけを見ても、すでに兄弟と縁が篤いです

実際のところはわかりませんが、天皇というお立場からして、友人も<sup>たき</sup>多岐に渡ることでしょう。

どのような人物と縁が篤いのかということでは――

天将星は家長の星ですから、各界のトップとの縁が深いと見なします。

それを“長男”という意味で捉<sup>とら</sup>えてもよいのです。  
庶民なら……長男とか、経営者と縁が深くなるとか、  
職場の上司とか、地域の店主とかと範囲を広げて考え  
てください。

悪くいえば——物知り顔で差し出がましく、偉ぶる、  
とかで、生意気だともいえるわけです。

☞ 人体図を観るときには、主星は自分自身ですから、  
主星が1番の焦点になります。

平成天皇の主星は〔貫索星〕です。

頑固で意地っ張りです。意固地になるくらい自分でこ  
うと決めたらテコでも動かない人です。

〔貫索星〕は主星のほかに、もう1つありますから、  
その意味合いは強まります。

もし3つあればもっと強まるわけです。

それに加えて、貫索星と同星<sup>どうせい</sup>ではないのですが、陰陽  
で〔石門星〕があります。石門星も守備本能の星です。

つまり、人体図に守備本能の星が3つあることになり  
ますので、極<sup>きわ</sup>めて（非常に）守備本能が強いです。

このような人物に対して、何かをいうときに、攻撃的  
態度をとると、この人物は“守り”を堅固けんごにします。  
それゆえに、決して素直に“うん”といいません。

もし説得をしようと思うのであれば、この人物の世界  
に入るようなやり方でないと無理ですね。

天皇ですから、上から目線での言い様いようは当然なわけ  
ですが、まわりの人たちは、かなり気をつかったこと  
でしょう。

普通の人であっても、このような人物に対して、上か  
ら目線の言い様はダメです。貝のように閉ざします。  
それゆえに、「人を観て法を説く」ことです。

〔調舒星〕〔龍高星〕は、すでにご説明した程度で良  
い  
ですね。

平成天皇の特徴は〔貫索星〕にあるのです。

そこに〔石門星〕の話を加えると、だいたいは纏まとまり  
ます。

そして、最身強であるのも特徴です。



\* 美智子皇后 1934(s9)-10-20

宿命(2) 美智子様

	貫索星	天印星
玉堂星	調舒星	調舒星
天恍星	貫索星	天印星

平成天皇を三分法の例題として、ご説明しましたが、あのような方法でよいわけです。

ここでは、美智子様は大まかにご説明します。

☞ 性格で注目しなければならないのは〔主星〕です。

美智子様の主星は〔調舒星〕です。

そして、調舒星が左手〔第三命星〕にもありますから、調舒星の質が強いといえます。

〔貫索星〕も2つありますので、その意味合いも強いです。

調舒星と貫索星を比較しますと〔主星〕として載っている星のほうが、その意味合いは強くなる。と考えてよいのです。

〔調舒星〕は、孤独、ロマン、反抗心、感性、という

質があることをお伝えしましたが、本質的には孤独で寂しがり屋の質をもちます。

主星に調舒星をもつ人体図は、内奥ないおうに悩み・葛藤が深いです。思い（想い）悩む人でもあります。

「二星相関変化法」にでてきましたが、美智子様には調舒星が2つあり、第一命星に〔玉堂星〕があります。このような姿は（水→×火）の七殺です。

『水下の激突』と表現しました。

とても気性の激しいところがあります。

その激しさは外に見えませんが、内面の葛藤が非常に激しい人です。内面の葛藤、ストレスの溜まりやすい質と考えてよいですね。

……声が出なくなったという話がありました。

その元凶は調舒星です。調舒星は伝達の星ですから、まわりに物事を伝えたいとする星です。

しかし、その表現（伝達）は直接的ではなくて、間接的で婉曲えんきよくな伝え方をします。

それゆえに、相手に・まわりに伝わりにくいのです。

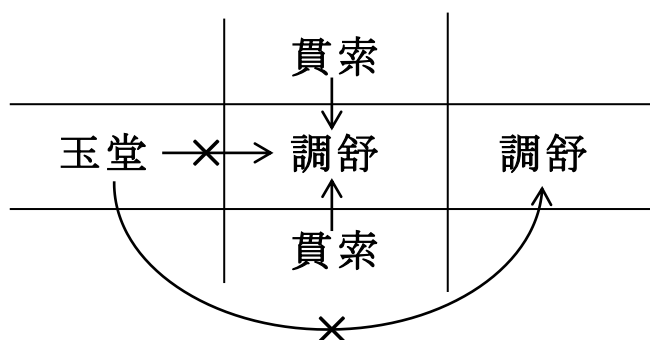
そうなる、まわりとの人間関係のなかで、誤解が起  
こりやすいといえます。

そのときに、『水下の激突』が起これば、心奥<sup>しんおう</sup>で大きな  
葛藤がうごきだします。

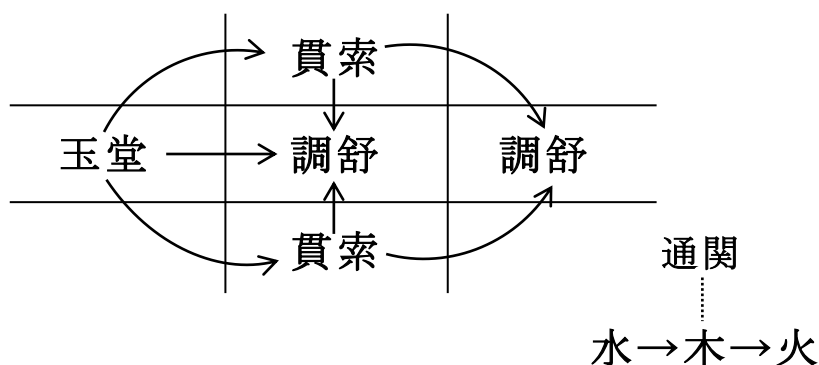
☞ では、どうしたら良いのでしょうか……。

「水火の激突」を和らげるためには、通関星として、  
[貫索星]をつかうのです。[貫索星]は2つあります。  
人物に当て嵌めると、兄弟・友人ですから、そういう  
人たちが身近<sup>みぢか</sup>に存在すれば、ストレスが和らぎます。

宿命（3）美智子様



宿命（4）美智子様



彼女にストレスが溜まったときに、ストレスを和らげるのは通関星の〔貫索星〕で五行は木性です。

**宿命（4）美智子様** ように、貫索星をつかいます。

つまらない話でもよいし、愚痴でもよいのです。

そのような人達と話すことで、ストレスが緩和かんわされます。あるいは、第四命星の親の場所をつかいます。

親の場所の〔貫索星〕をつかうには、実際の母親をつかいますが、母親はすでに他界しています。そこで……第二命星は子供の場所です。子供をつかっても良いのですが、子供の問題でストレスが溜まったわけです。

マスコミには、自分の発言したことと違う内容が記事に書かれたのがストレスになった。

とありますが、それはどこかに虚言きょげんがあるわけです。

実際は子供の結婚問題で、雅子さんを苛いじめているとかの問題が報道されたことがあったわけです。

⇒ 平成天皇は最身強で、主星は〔貫索星〕です。

もう1つ貫索星があります。

こういう人は、自分の意思を曲げないと表現すれば、格好はよいですけど、わからず屋にもなりかねないのです。

よほど苦勞して、<sup>さいみきょう</sup>最身強の星が消化されれば別です。そうすれば星が柔軟性をもちます。

しかし——皇太子であったということは、現実面での苦勞もなく育っています。

この人と結婚するということは非常に苦勞します。

美智子様は、普通の苦勞ではなく、ものすごい苦勞をされたといえます。

⇒ 美智子皇后は、天印星・天印星・天恍星ですから、人体図は<sup>みちゆう</sup>身中です。

平成天皇は最身強です。天皇は忙しく動きまわることで、宿命が生きてきます。

それに身中の人が付いて行こうとすると、最身強に振りまわされてしまつて疲れます。

しかし、最身強の平成天皇が身中の美智子様に合わせ

ていたら・合わせようとすれば、成天皇は欲求不満を  
起こします。

最身強と身中というエネルギーの大きな隔<sup>へだ</sup>りがある  
2人の関係なのです。

〔たとえば〕外国訪問で、つぎから、つぎとなると、  
美智子様はくたびれるのです。

これで相性を観ることもできますよ。

最身強と身中ですから、かなりエネルギーは違います  
ので、一緒にいると美智子様は振り回されます。

この部分は、生き方が合いませんので、相当に苦勞さ  
れたと想<sup>おも</sup>えます。

∞ 身強・身弱を5段階にわけますと：

〔最身強〕 〔身強〕 〔身中〕 〔身弱〕 〔最身弱〕 です。

相性として考えるときに、となり同志なら相性の良い  
ほうに入ります。

☞ 平成天皇と美智子皇后の人体図を五行に分けます。

習得本能

守備本能

伝達本能

水性

木性

火性

『平成天皇』 龍高星 → 貫索星・貫索星・石門星 → 調舒星

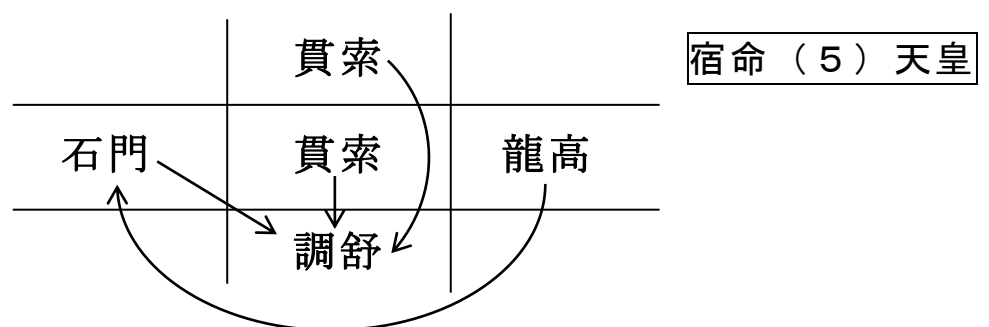
『平成皇后』 玉堂星 → 貫索星・貫索星 → 調舒星・調舒星

上記のように、お2人の人体図を五行で並べました。  
五本能で並べてもおなじです。

平成天皇は〔龍高星〕が1つあります。龍高星は水性です。

〔貫索星・貫索星〕〔石門星〕は木性で3つあります。

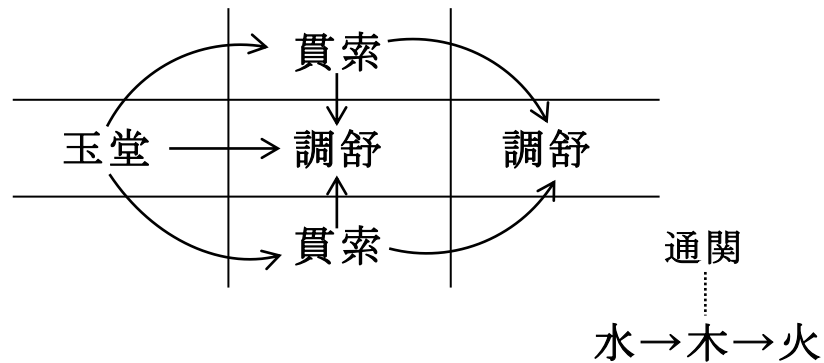
〔調舒星〕は火性です。



宿命(5)天皇

龍高星の水性から（水→木→火）と流れて、調舒星で止まっています。〔龍高星〕が始星<sup>しせい</sup>で、〔調舒星〕は帰星<sup>きせい</sup>です。始星は人体図のなかで、循環がはじまる星です。

## 宿命（6）美智子様



お2人は、美智子様が上記のように、通関（木性）をつかえばですが——おなじ五行の水性ではじまって、おなじ五行の火性で終わります。

〔玉堂星〕が始星<sup>しせい</sup>で、〔調舒星〕は帰星<sup>きせい</sup>です。

本能でいえば——守備本能ではじまって、伝達本能で終わります。

このように並べて見ると、お互いの本能がピッタリと一致しています。

このような姿は相性が良いです。

〔相性の良さ〕というのは、いろいろありますが、この場合の相性の良さは「相手の考えが良くわかる」ということです。



おなじ本能をもっていますし、その流れもおなじです。相手の考えていることが良く理解できるということです。そういう意味の相性の良さです。

人体図が相生で循環して止まる場所を「帰星」といいますが、そこは人生の目的でもあるのです。

つまり、目的が一致します（目的を一致できます）。

お二人が生きて行くときに、一致協力できるということです。ゆえに、星の循環の相生は良いです。

ただし、「自分の考えが、相手にもわかる」「相手も自分が考えていることがわかる」——それが良いとはいえませんし、それが全てでもありません。

☞ 星の強さは、最身強と身中なので、合わないために苦勞します。といたしましたが、星の循環ではピッタリ一致しています。

妻は振り回されて疲れますが、思考回路がおなじなので、私の夫の性格はこうだという感覚になります。

これが私の夫だという感覚ですね。

しかし、お互いの気持ちが変わり過ぎると、困る場合もありますよ。

それは運勢が別だからです。

“運勢は別”ということは、お互いに気が合っているも、別れなくてはならないような状況がきたときにはこじれます。

〔思考回路がおなじ〕このような夫婦はなかなかいないのです。

重なっている箇所はあっても、始めから終わりまで、ピッタリ一致しているということはまれ稀です。

相手の気持ちが手に取るように、解りますので、離婚するという事例はほとんど無いのですが、相手の気持ちが解り過ぎてしまい、離婚ということもあり得るでしょう。

「妻の気持ちが解らない……」とあって、離婚する人もいれば、「解りすぎて嫌になる……」ということもあるでしょう。

☞ 美智子様のように〔天印星〕が2つある場合には、  
とても“子供縁”はうすいのです。

普通は一人くらいしか生まれません。

いろいろ噂があるようですが……子供縁は薄いです。

出来が良い子供が生まれたら、一人くらいしか生まれ  
ないのです。

【初年】 47回目【人体図三分法】 終わります

つぎの授業 ⇒ 【初年】 48回目【地時空間】です。